

名古屋大学附属図書館企画展示

# 古書は語る

—館蔵の江戸文学資料を中心に—

図録ガイド



平成14年10月16日(水)~  
10月31日(木)

名古屋大学附属図書館

# 目 次

展示会開催にあたって	1
古書を通して死者は語る	2
1) 特集「元禄期の絵入り読物、浮世草子を楽しむ」	
著者略歴	3
西鶴織留(井原西鶴) 4 / 世間胸算用(井原西鶴)	6
傾城禁短気(江島其磧) 8 / 本朝智恵鑑(北条団水)	10
当世御伽曾我(江島其磧) 12 / 風流東鑑(江島其磧)	14
世間娘容気(江島其磧) 16 / 浮世親仁形気(江島其磧)	18
女曾我兄弟鑑(江島其磧) 20 / 日本契情始(江島其磧)	22
西行撰集抄(西鶴挿画) 24	
2) 書物は語る	
(1)書き入れ(識語)は語る	
宇治拾遺物語、つれづれ草拾遺	25
(2)表紙裏からの贈り物	
田舎弁疑、鎌倉比事	26
(3)御師の学芸 その1	
名目鈔(三種) 藤谷家御教訓	27
(4)御師の学芸 その2	
伊勢物語、伊勢物語抄	28
竹聞、新式目	29
3) 古文書は語る	
(1)戦国時代の武将と伊勢の御師	
朝倉家関係文書	30~32
納所勘定帳、大々御神楽献立帳	32
(2)伊勢の特権商人、角屋家	
角屋家文書	33~34

## ギャラリートーク(展示資料の解説)

講 師：塩村耕 文学研究科助教授

日 時：平成14年10月26日(土)午後1時30分~3時

会 場：演習室(4階)

## 展示会開催にあたって

名古屋大学附属図書館に常設展示室が平成13年2月に設置されてから、常設展示だけでなく、毎年特別企画展示を行っています。今年度は、「古書は語る」と題して江戸文学資料を中心に展示を行います。ホームページ上での電子展示も行いますので、インターネットを経由することによっても市民の方々にお楽しみいただけます。また、10月26日に、ギャラリートークを行い、展示資料の解説を行うとともに、懇談を行える機会を設けました。

名古屋大学附属図書館は、現在、従来型図書館機能と電子図書館機能を有機的に結合したハイブリッド図書館を目指していますが、今回の企画展示もその一環と見ることができます。古典籍の有効利用をはかることは、カレントの雑誌や本と同様に大事な図書館の役割です。最近の定員削減や予算の制限のため、古典籍を扱う技能が、図書館職員の中でうまく継承できない傾向があります。2年前から、文学研究科の塩村助教授をはじめ、この分野を専門とする教官にご指導をいただき、継続的に勉強会を行い、その成果として今回の展示が企画されました。その意味では、全国に先駆けて、大学図書館が抱えているこの種の問題への答の1つがここにあるのではないかと思います。国立大学の法人格取得を平成16年4月に控え、個性豊かな名古屋大学を支える附属図書館のあり方を今後も、職員一同考えていきたいと思っております。

最後になりましたが、今回の企画展示に全面的にご協力をいただいた文学研究科の塩村助教授に厚くお礼申し上げます。

平成14年10月

名古屋大学附属図書館長  
教授 伊藤 義人

## 古書を通して死者は語る

森鷗外の史伝小説『<sup>ちゅうさい</sup> 渋江抽斎』は次のような話から始まる。鷗外は「徳川時代の事績」を探るために<sup>ぶかん</sup> 武鑑（大名および旗本の名鑑で、江戸時代の初期より毎年刊行された小冊子）を収集していた。その過程で「弘前医官<sup>く</sup> 渋江氏蔵書記」という蔵書印が捺してある武鑑にしばしば会うことに気付く。陸軍の軍医であった鷗外は、旧幕時代に弘前藩の、やはり「医官」であった渋江氏なる人物が、自分と同じような好みの古書収集にいそしんでいたことに奇しき因縁を感じる。そしてその伝記を、解明の過程とともに詳細に綴ったのが『<sup>ちゅうさい</sup> 渋江抽斎』なのであった。

人は誰しも、自分と同じような趣味や感懐を他者に見出すときに喜びを感じるものである。それが時代を超えた遠い過去の人間である場合には、あたかもヴィンテージワインの如く、時の醸し出す深い滋味がそこに加わる。そのような古人との出会いは、当然ほとんど古書や古文書を通して成されるもので、そんな経験の蓄積を「教養」と呼ぶ。

さらに言えば、誰かの手によって加工され、複製された本文を味わうだけでは不十分で、願わくは原本にあたりたい。鷗外先生の経験の如く、個々の生身の肉体をもった古書こそが、より多くを語ってくれるからである。

今回の展示は、書誌学に志の有る図書館員の皆さんとの勉強会から発想された。勉強は当初、日本古典籍の書誌記述法から始まり、書籍の内容把握のために必然的に古文書の解読法に移った。前近代の文字書記は省力化を極端に進めた草書体による筆記に基づいており、一方近代はそれを捨てて、印刷も筆記も活字体（楷書体）に統一してしまった。考えてみるとずいぶん無茶なことをしたもので、実はこのことは、近代人が本をまるまる写すような営みを止めて文字をあまり書かなくなったこと、つまり刊本と写本とが平行して行われた近世に対し、近代の書物は刊本に一本化されるという、書物文化に生じた大変化にその一因がある。

勉強会のテキストとして西鶴の浮世草子が選ばれた。その成果の一つとして、名古屋大学附属図書館に比較的よくそろっている浮世草子を取り上げ、多くの人々に江戸時代の読書を再体験してもらう展示を試みることとなった。併せて、現在取り組んでいる<sup>しゅがく</sup> 神宮皇学館文庫の悉皆調査で得られた知見を生かし、古書と古文書をめぐる若干のトピックを取り上げた。

幸いなことに、日本は書物文化のさきわう国であった。いわゆる書物だけではない、古人の残した<sup>だんかんれいぼく</sup> 断簡零墨のたぐいまでが大切に保存され、<sup>しょうがん</sup> 賞翫された。そのような肉体を備えた古書・古文書たちを集め、大切に保存し、利用に供すること、そのみならず、「古書たちの語り」すなわち「死者たちの声」を、しかるべく世の中に発信してゆくことも、これからの図書館のもつ大きな役割ではなからうか。

平成14年10月

文学研究科助教授（日本文学）  
塩村 耕（しおむら こう）

## 1) 特集「元禄期の絵入り読物、浮世草子を楽しむ」

大正時代、汽車の中で乗客たちの本を読む声がかましい、という新聞投書があったそうだ。ことほどさように我々の先人たちは読書の際に音読をした。江戸時代の前期から中期にかけて数多く刊行された浮世草子は、同時代の風俗描写を主眼に置いた読み物で、いわば日本最初の大衆小説である。ぜひ音読して昔の読書をしのんでいただきたい。

それから、文字の大きい、目に優しい本であったことにも注目していただきたい。これ以後、書物の1頁あたりに収められる文字数は、現代に至るまで右肩上がりで増え続ける。この時代の書物の、少ない文字の容量は、必然的に文学における描写のあり方を規定した。つまりくださしい描写はやりたくとも出来なかったことがわかる。

### 著者略歴

井原西鶴（いはらさいかく） 1642 - 1693

いわずと知れた浪華の巨匠。若い頃は俳諧師として活躍、41歳のときに書いた『好色一代男』が大ブレイクしてから、散文作家に方向転換する。西鶴により、同時代の浮世を生きる人々の風俗や人情を描写した「浮世草子」という新しいジャンルが出現、日本文学の期を画した。塩村助教授の力説するところによれば、西鶴を読まずに日本文学の歴史を語ってはならないそうである。そのプライベートな生活についてはよくわからない点が多いが、若くして愛妻をなくし、盲目の娘にも先立たれるなど不遇な身の上だったようである。

[ 西鶴作の主な浮世草子 ]

- ・『好色一代男』天和二年（1682）
- ・『西鶴諸国はなし』貞享二年（1685）
- ・『本朝二十不孝』貞享三年（1686）
- ・『日本永代蔵』貞享五年（1688）
- ・『西鶴置土産』元禄六年（1693）
- ・『諸艶大鑑』貞享元年（1684）
- ・『好色一代女』貞享三年（1686）
- ・『武道伝来記』貞享四年（1687）
- ・『世間胸算用』元禄五年（1692） \* 今回展示
- ・『西鶴織留』元禄七年（1694） \* 今回展示

北条団水（ほうじょうだんすい） 1663 - 1711

西鶴の一番弟子で京の人。西鶴から発句「<sup>まどか</sup>団なるはちすや水の器<sup>うづもの</sup>」を贈られ、号を団水とする。他に白眼居士・滑稽堂の号がある。西鶴の死後、大阪に移住して西鶴庵を守りつつ、誠実に西鶴遺稿を整理して世の中に送り出した。団水自身の浮世草子作家、俳諧師としての著作活動は25歳ころからはじまり、晩年までに数多くの作品を上梓する。

なお、いわゆる西鶴作品の多くを非西鶴作とする説がある。もしも西鶴以外の者の作を含むとするならば、その実作者の最右翼に団水がいたはず。ところが、団水の単独作と、いわゆる西鶴作との距離は余りに大きく、作品としての質の差は決定的である。よって非西鶴説は成り立たない。

[ 団水作の主な浮世草子 ]

- ・『色道大鼓』貞享四年（1687）
- ・『武道張合大鏡』宝永六年（1709）
- ・『日本新永代蔵』正徳三年（1713）
- ・『昼夜用心記』宝永四年（1707）
- ・『本朝智恵鑑』正徳三年（1713） \* 今回展示

江島其磧（えじまきせき） 1666 - 1735

西鶴以後の浮世草子界の第一人者で、むしろ西鶴以上に同時代および後世に大きな影響を与えた。京の富裕な餅屋の4代目主人でもある。本名は村瀬権之丞。34歳のときに、当時の有力な版元であった八文字屋から刊行した役者評判記『役者口三味線』が成功をおさめたことに気をよくして、旺盛な執筆活動を展開する。しかし、八文字屋と利益配分をめぐり確執、対抗して自ら江島屋という本屋を興したが失敗した。

[ 其磧作の主な浮世草子 ]

- ・『けいせい色三味線』元禄十四年（1701）
- ・『世間子息気質』正徳五年（1715）
- ・『国姓爺明朝太平記』享保二年（1717）
- ・『浮世親仁形気』享保五年（1720） \* 今回展示
- ・『頼朝鎌倉実記』享保十二年（1727）
- ・『傾城禁短気』宝永八年（1711） \* 今回展示
- ・『世間娘気質』享保二年（1717） \* 今回展示
- ・『武道近江八景』享保四年（1719）
- ・『世間手代気質』享保十五年（1730）

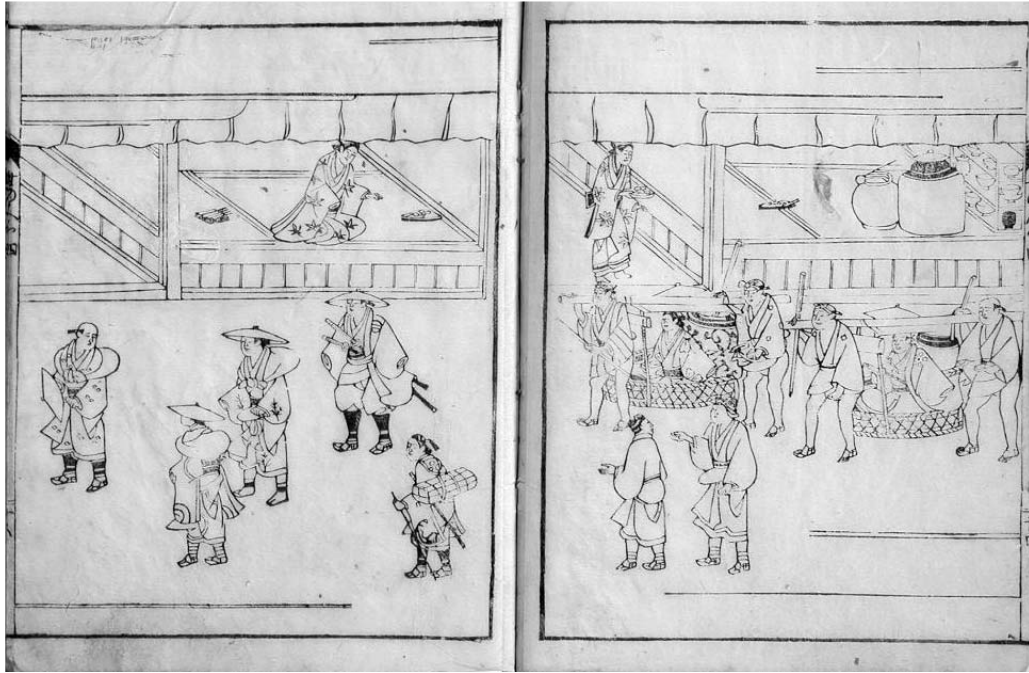
## 絵入 西鶴織留(さいかくおりどめ)

大本6巻6冊

元禄其月其日、難波西鶴自序。元禄七年卯月上旬、団水序。

元禄七年(1694)三月、万屋清兵衛(江戸)・雁金屋庄兵衛(大阪)・上村平左衛門(京)刊。

(岡谷文庫 913 52/I)



(巻4の3「諸国の人を見知るは伊勢」14ウ・15オ)

西鶴死去(元禄6年8月)後に刊行された遺稿集のひとつ。23の短編を収録。前半(副題「本朝町人鑑」)は、遊郭通いが幸いして思わぬ成功をする造り酒屋の惣領息子など、町人を主人公に家の盛衰を軸とした話が続く。後半(副題「世の人心」)では、大名屋敷の家来、医者・職人・質屋・下女・官女・腰元・乳母と様々な身分・職業の人々が登場し、当時の世相が生き生きと描かれている。

挿絵は

江戸時代の伊勢参道のおもかげが再現された町として、最近人気の観光スポット「おかげ横丁」。しかし、当時の参道は「おかげ横丁」をはるかにしのぐ賑わいです。日本全国から老若男女、富める人も貧しい人も、武士も町人もこぞって、お伊勢参りに集ったのです。しかし、どうやら純粋な信仰心によるものばかりではなさそうで、今到着した駕籠の男女もなにやらあやしい様子です。



新板絵入 世間胸算用： 大晦日は一日千金（せけんむねさんよう）

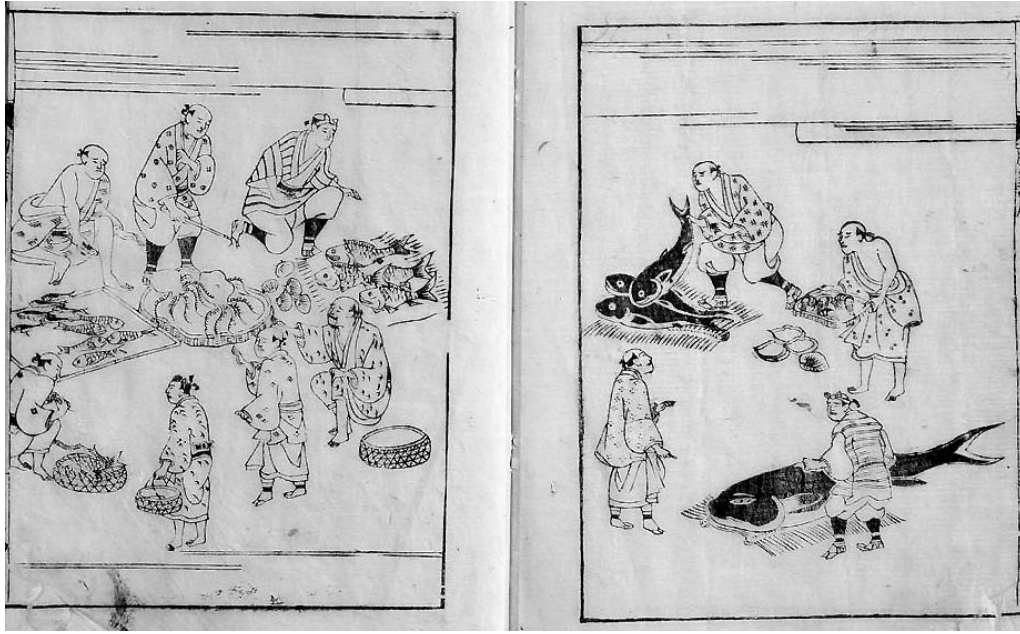
大本5巻5冊

内題：胸算用

元禄五申歳初春、難波西鶴自序。

元禄十二年（1699）八月、万屋彦太郎（大阪）刊（元禄五年初版本の再版本）。

（岡谷文庫 913 52/I）



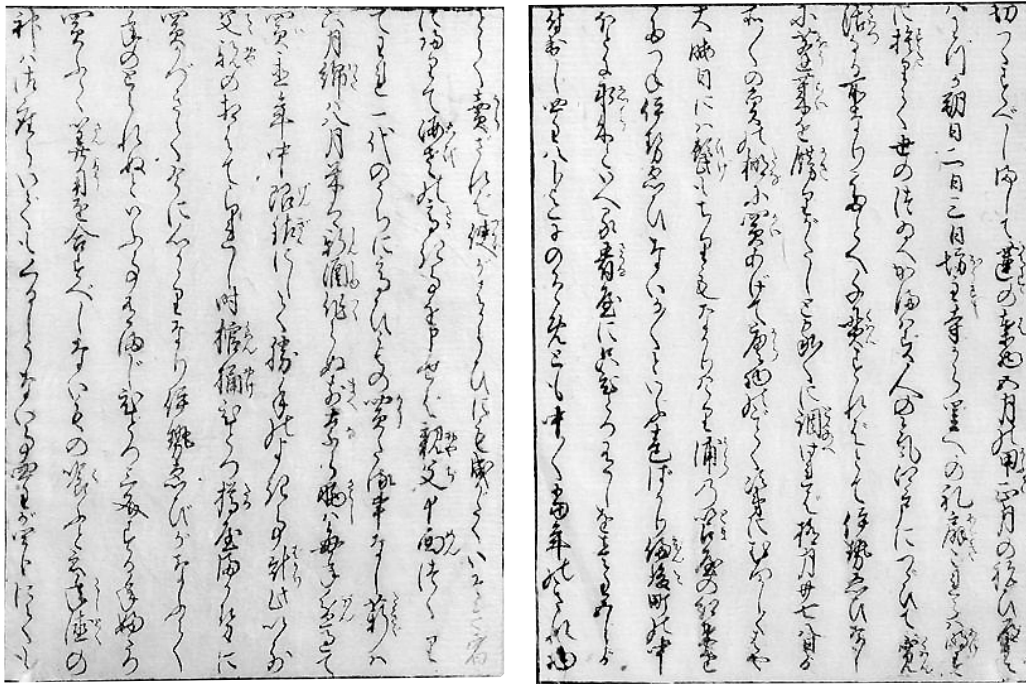
（巻1の3「伊勢海老は春の梃」13ウ・14オ）

『世間胸算用』は、副題に「大晦日は一日千金」とあるように、大晦日の一日に焦点をあて、金銭に翻弄される町人生活の悲喜劇を描いている。当時、大晦日は一年の総決算日で、様々な掛け売りのつけを払ったり、また売り掛け金を回収しなければならない。そのような大変な一日に集約される人とカネとのかかわり方を、ハナシの技法を駆使して描いた西鶴最高傑作の一つ。

挿絵は

正月用の魚介類が売られている魚屋の風景。話の主題となる伊勢海老は、右端の男が手に持っています。この時はまだ4つ残っていたようです。手前の大きな魚は、当時正月用として珍重されたブリです。中央下の男達の手まねきをするようなしぐさは、会話中（値段の掛け引きの最中）であることを表しています。





(巻1の3「伊勢海老は春の梃」12ウ・13オ)

翻刻

・・・切つくすべし。まして蓮の葉物(季節商品)、五月の甲、正月の祝ひ道具は、わづか朔日、二日、三日坊主。寺から里への礼扇、これらは明<sup>あけ</sup>ず<sup>すた</sup>に捨りて、世のつゑへかまはず、人の気、江戸につゞひて寛活(ぜいたく)なる所なり。たとへ千貫すればとて、伊勢<sup>いせ</sup><sup>えび</sup>なしに蓬菜(正月用の飾り)を飾りがたしと、家々に調ければ、極月(12月)廿七八日より所々の魚の棚に買あげて、唐物のごとく次第にむつかしく、はや大晦日には、髭もちりもなかりけり。浦の苦屋の紅葉をたづね(「見渡せば花も紅葉もなかりけり・・・」の和歌をもじる)、「伊勢<sup>いせ</sup>えびないか、ないか」といふ声ばかり。備後町の中ほどに永来といへる肴屋に、只ひとつ<sup>あり</sup>し<sup>し</sup>を<sup>も</sup>ち<sup>ふ</sup>んより<sup>ふ</sup>り<sup>ん</sup>付出し、四<sup>も</sup>ん<sup>は</sup>ん<sup>は</sup>ん<sup>に</sup>の<sup>ぞ</sup>め<sup>ど</sup>も、中々当年のきれ物(品薄物)とて<sup>う</sup>ら<sup>ざ</sup>れば、使がはからひにも成がたく、いそぎ宿に帰<sup>か</sup>りて、海老の高き事を申せば、親父<sup>おや</sup>十<sup>じゅう</sup>面<sup>めん</sup>(<sup>しやうめん</sup>洪面)つくりて、「われ一代のうちに、高ひもの<sup>あ</sup>り<sup>た</sup>る<sup>事</sup>なし。薪は六月、綿は八月、米は新酒作らぬ前、奈<sup>な</sup>ら<sup>晒</sup>は毎年盆<sup>ぼん</sup>過<sup>か</sup>て買<sup>か</sup>い置<sup>お</sup>き、年中<sup>ねんちゆう</sup>現銀(現金払い)にして勝手<sup>かた</sup>のよき事計。此以前、父親の相はてられし時、棺桶ひとつ樽屋<sup>くわんぼく</sup>まかせに買<sup>か</sup>い<sup>か</sup>ぶ<sup>つ</sup>て(買いかぶつて)、今に心<sup>こゝろ</sup>が<sup>い</sup>り<sup>なり</sup>なり。伊勢<sup>いせ</sup>えびが<sup>な</sup>ふ<sup>て</sup>、年のとられぬといふ事有まじ。ひとつ三文する年、ふたつ<sup>ふた</sup>つ<sup>買</sup>ふ<sup>て</sup>算用<sup>ざんよう</sup>を<sup>あ</sup>わ<sup>せ</sup>す<sup>べ</sup>し。ないもの<sup>く</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>言</sup>、年徳の神(一年中の恵方を司る神)は、御座<sup>ご</sup>ら<sup>い</sup>で<sup>も</sup>くる<sup>し</sup>う<sup>な</sup>い<sup>事</sup>。四<sup>よ</sup>ん<sup>が</sup>四<sup>し</sup>に<sup>て</sup>も、・・・

話の大意

正月用の飾りのため伊勢海老が高騰して、品薄。ようやく見つけた伊勢海老は高値で買えない。これを聞いた家の主は、「高いものは買わない。物は安い時期に買うのがよい。伊勢海老がなくても年は越せる。安い年に二つ買って算用を合わせる。」と機嫌が悪いよう。

(米津)

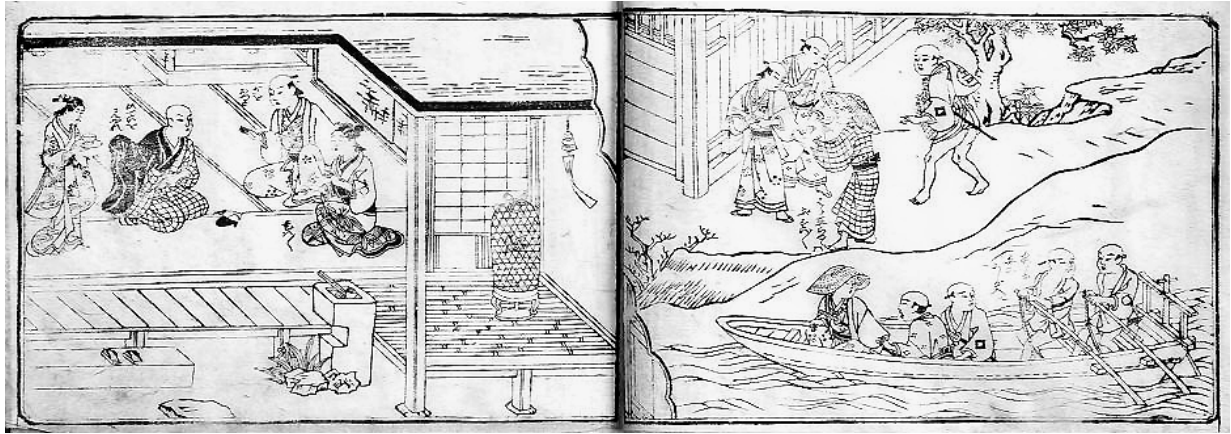
## 色道大全 傾城禁短気 (けいせいきんたんき)

横本6巻6冊(巻4・6欠)

宝永八年卯月中旬、作者八文字自笑自序

[宝永八年(1711)卯月、八文字屋八左衛門(京)刊]

(岡谷文庫 913 52/H)



(巻1の2「三野の女郎安心の身請」13ウ・14オ)

江島其磧作。全6巻のうち、1～2巻では宗論になぞらえた男色・女色優劣論。3巻では説法になぞらえ各地・各層の非公許売色者の様相を、4～6巻では説法になぞらえ吉原(江戸)・新町(大坂)・島原(京)の遊女と客との駆け引きや遊びの種々の様相を述べる。諸色道を集成し、趣向の奇抜さ、構成の巧みさで西鶴以後の技巧重視の浮世草子を代表する作品。

挿絵は

右上：吉原大門前、先ほどの遊客は、かぶり物を取り、羽織を着て、脇差をさしています。破れた編み笠をかぶった男が、遊客を待ち構えています。

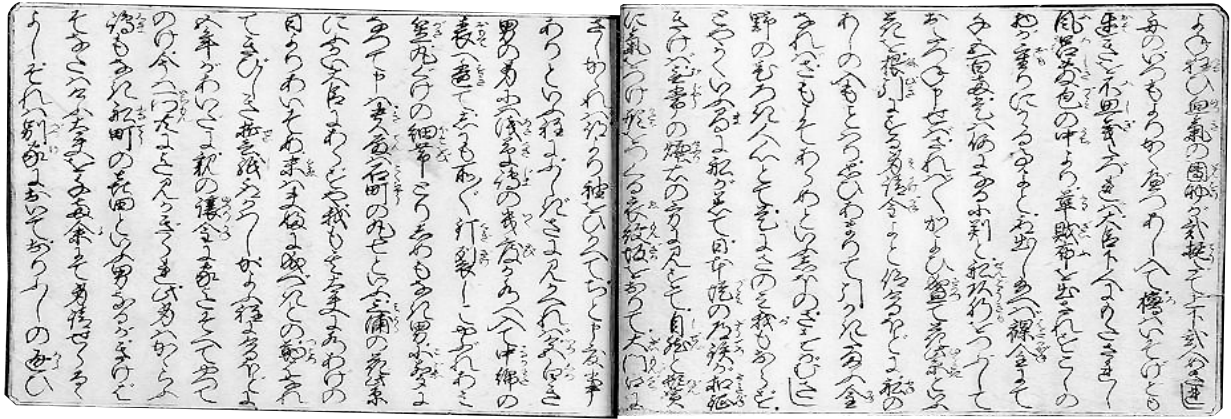
右下：吉原へ向かう遊客(先頭で編み笠をかぶっています)と供2人が、舟(船頭2人)に乗っています。

左：揚屋の座敷の場面です。遊客(右から2人目)と身請けされる遊女(一番右)が2人並んですわり、前では太鼓持ち(坊主頭の男)が機嫌をとっています。

画中詞は右から順に

「めいよな舟のあしが入る」「はら立らるゝはぶすいぶすい」

「是は是は」「がをおつた」「此ていを見やれ」



(巻1の2「三野の女郎安心の身請」9ウ・10オ)

翻刻

・ ・ ・ よね狂ひ血氣の団助が忒挺にちようたて、上下忒人めされし舟の、いつもよりかくべつあしいり入て、櫓はいそげども遅きを不思議たづれば、大臣、下人にもたされし風呂敷包の中より、革財布を出され、「すこしの物が重りにかゝる事よ」と取出し給へば、裸金にて千五百両。「是は何になる小判」と、船頭肝をつぶしておたづね申せば、「さればさればかよひ盛て花紫といふ花を、根引にする身請金よ」と仰けるほどに、「船のあしの入もことはり、思ひあまりて引かきたまふ金なれば、さもこそあらめ」といふしほの、さすがむさし野のひろき人心とて、是にさのみ我がもおらず。とやかくいふ間に船がつき着て、日本堤の道鉄が扣鉦たきがねきけば、無常の煙右の方に見すて、自然びんと鬢に気をつけ形をつくる衣紋坂をおりて、大門口にさしかくればれば、跡より袖をひかへて、「ちと申度事あり」といふ程に、ふしぎさに見かへれば、色白き男の、身には浅草嶋の幾度か水へ入て、中綿の表へ透て、しかも所々釘裂してやぶれあみ笠、丸くけの細帯とりしめもなき男、小声になつて申は、「貴殿は石町の丸七といふ、三浦の花紫にふかい大臣にあらずや。我も其太夫に水あげの日よりあいそめ、末は夫婦なるに成べきとの、勤はなれてきびしき誓紙取かはし、かよふ程にけるほどに五年があいだに、親の讓金ゆずりがねに家迄そへてやつてのけ、今は一門共に迄見かざられ、此身はかゝらふ嶋もなき船町の喜田といふ男なるが、きけばそなたはけふ太夫を千両余にて身請せらるゝよし。それは別家において、おりふしの通ひ・

・ ・

話の大意

石町の金持ち丸七が、吉原三浦屋の太夫花紫を身請けするため、金千五百両を供の下人に持たせ、吉原へ向かいますが、小判の重さで舟足が遅くなってしまいます。一方、吉原大門口では、花紫と将来を誓い合いながら、身上を潰し、没落した船町の喜田が丸七を待ち構えていました。

(岡田)

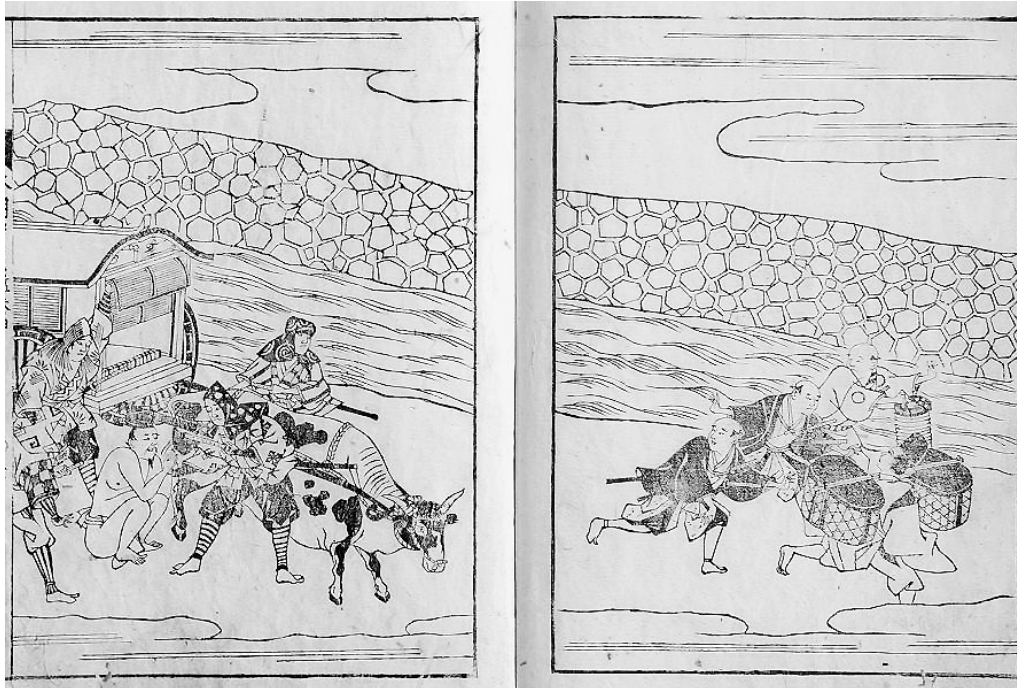
## 絵入 本朝智恵鑑（ほんちょうちえかがみ）

大本 6 巻 6 冊

宝ながき宝珠の牛のむつましき年（宝永六年・1709）の弥生長閑なる日、洛陽滑稽堂のぬし団粹自序。

正徳三年（1713）正月、出雲寺和泉掾（京師三条通・江戸日本橋）刊。

（岡谷文庫 913 52/H）

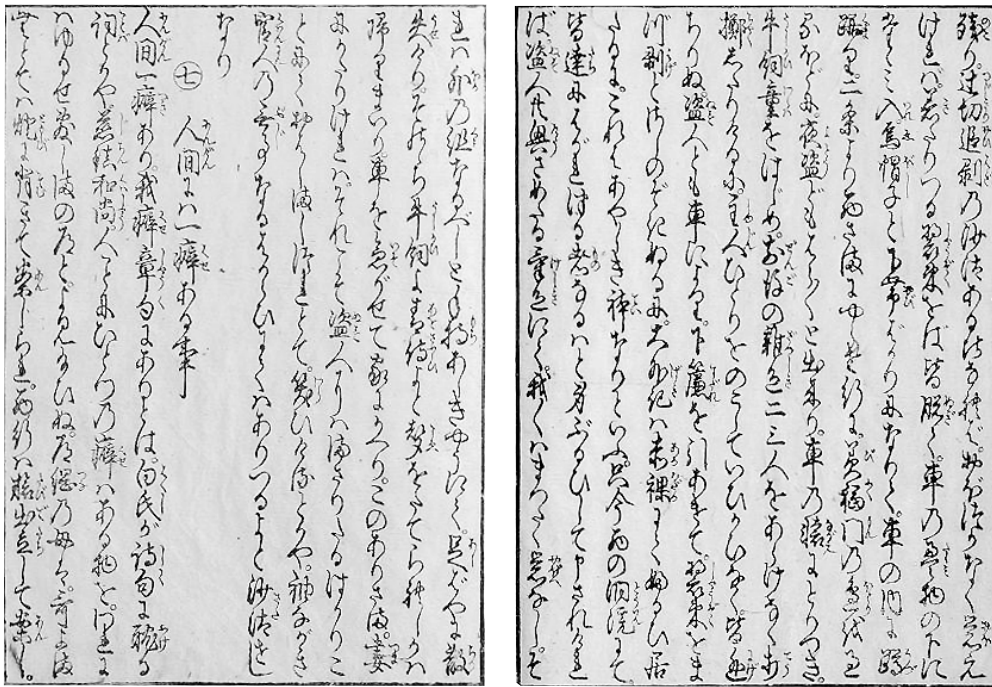


（巻4の6「夜盗を謀る機転の事」19ウ・20才）

知恵に関する中国の故事類を集めた先行書『智恵鏡』をまね、日本の知恵者に関する話を集めた短編集。その内容は教訓的であり、仏説を多く含む。作者である北条団水の没後に刊行された。

挿絵は

盗賊に襲われ、従者たちは逃げ出してしまいました。盗賊たちは、大外記の装束を剥ぎ取ろうとしたものの、すでに丸裸の姿を見てとまどっています。



(巻4の6「夜盗を謀る機転の事」18ウ・19オ)

翻刻

・・・残り。辻切追剥の沙汰ある比なれば、おぼつかなく覚えければ、着たりつる装束をば皆脱て、車の置物の下にたゝみ入、烏帽子と下帯ばかりになりて、車の内に蹲踞り、二条より西さまにやらせ行に、美福門の辺を過るほどに、夜盗どもはらはらと出来り、車の轆にとりつき、牛飼童をはじめ、前後の雑色二三人をあらけなく打擲したりけるに、主人ひとりをのこしていひかひなく、皆逃ちりぬ。盗人ども車により、下簾を引あけて、「装束をまつ剥」とさしのぞきぬるに、大外記は赤裸にてふるひ居たるに、「これはあやしき躰なり」といふ。「只今西の洞院にて、皆達にはがれつる者なるは」と、身ぶるひして申されければ、盗人共、興さめたる気色にて、「我々はまつたく覚なし。それは外の組なるべし」と、手持あしきやうにて、足ばやに散失けり。そのち「牛飼よ、青侍よ」と、声をたてられしかば、帰りまいり、車を急がせて家にかへり、このありさま、妻にかたりければ、「それこそ盗人にはまさりたるはかりごとにておはしましつれ」とて、笑ひけるとかや。「袖ながき官人の、無事なるはからひにてはありつるよ」と沙汰せしなり。

話の大意

阿蘇の大外記は夜更けに内裏より帰る途中、盗賊に襲われる事を心配して、やおら着物を脱ぎ烏帽子と下帯だけになって車のなかにうづくまっていた。案の定、盗賊に襲われた裸の大外記は、先ほど皆さんに衣服を剥ぎ取られた者だと嘘をつきます。身に覚えのない盗賊達は、別の盗賊がすでに襲ったあとだと思い、興ざめして去って行きました。盗賊まさりの機転で難を逃れたという話です。

(眞野)

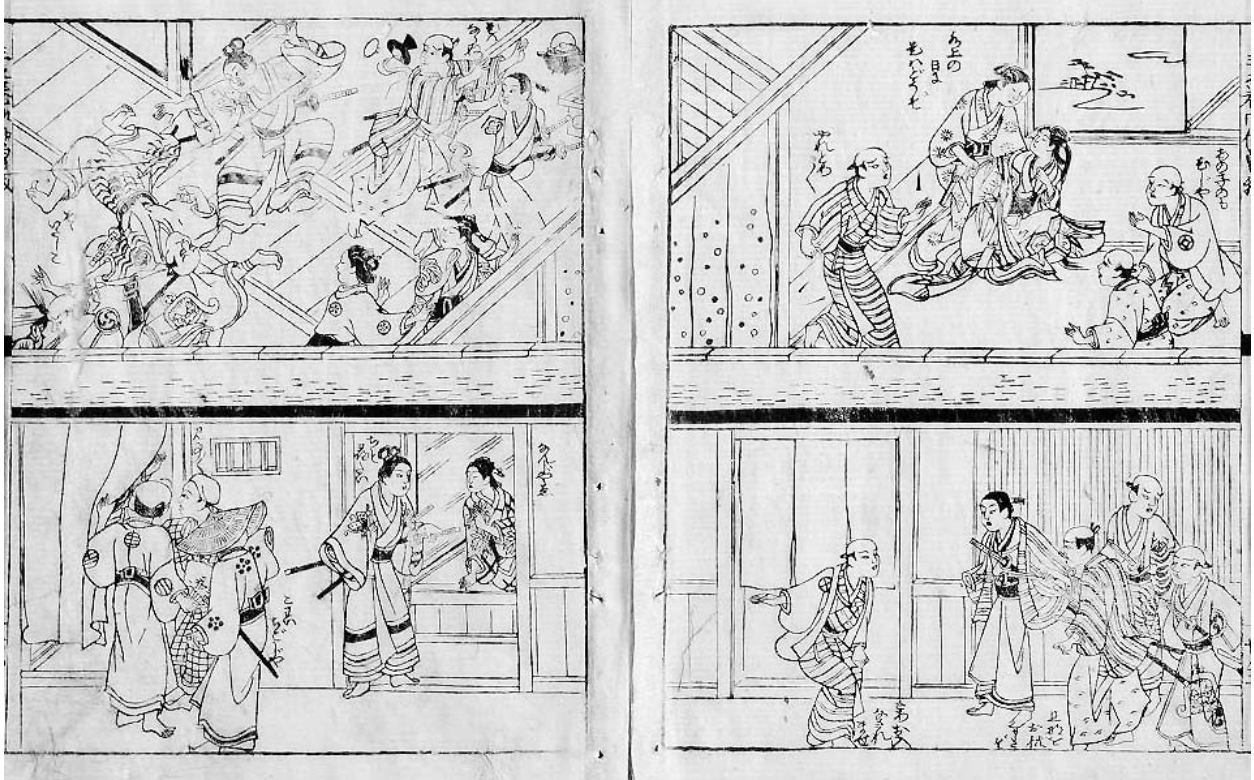
## 新板絵入 当世御伽曾我（とうせいおとぎそが）

大本5巻5冊（巻1欠）

〔正徳三年（1713）〕 八文字屋八左衛門板 刊。

〔作者江島其磧〕

（岡谷文庫 913 52/H）



（巻3の4「水上は泪の雨古郷の母の煩ひ」23ウ・24オ）

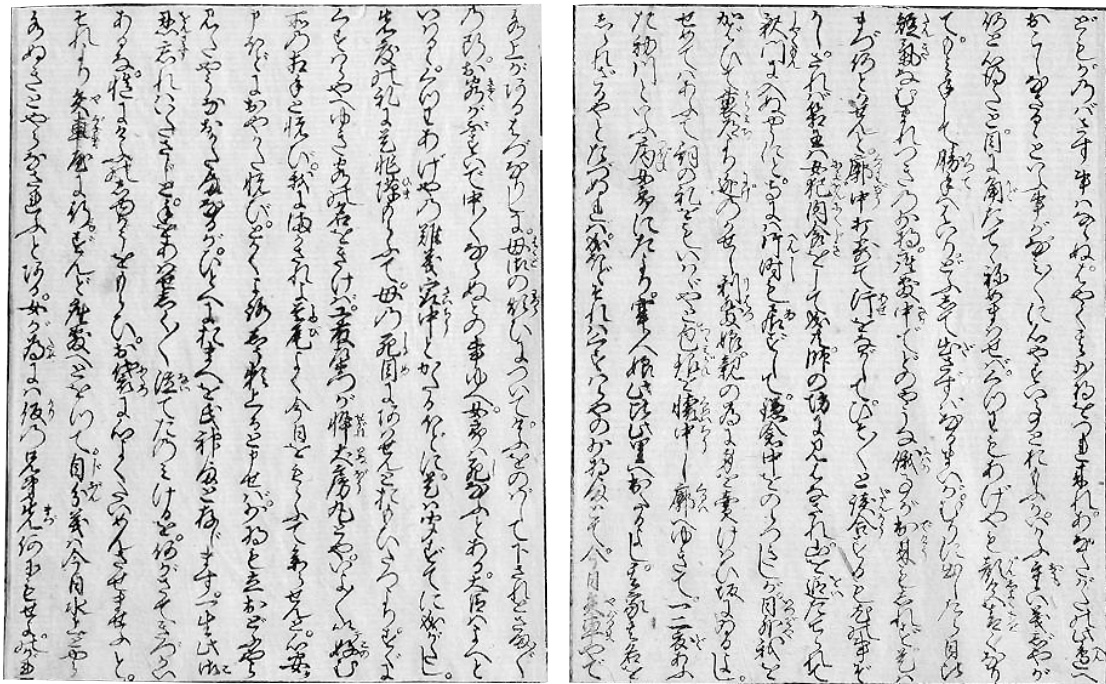
日本三大仇討ちの一つ、「曾我兄弟の仇討ち」を題材としている。『当世御伽曾我』では、曾我兄弟の産まれる前の、仇討ちの原因となった争いや、兄弟の出生と成長の逸話が中心である。兄弟の実父、河津三郎祐泰は、領土をめぐる争いにより、弟工藤一鷹祐経によって暗殺される。祐泰の子、一幡丸（後の曾我十郎祐成）と菅王丸（後の曾我五郎時宗）は、曾我家の子となったが、実父の仇討ちの思いはどんどんと強くなっていく。其磧（推定）作の長編時代物浮世草子。後編は『風流東鑑』として刊行された。

挿絵は

- 右上：少将が水上の日を迎えました。
- 右下：店の亭主が愛想よく客を迎えています。
- 左上：菅王が客を座敷から投げます。
- 左下：菅王がやってきました。

画中詞は右から順に

「あの子のも尤<sup>もつとも</sup>じや」「旦那をお供<sup>みずあげ</sup>申たぞ」「水上の日に是はどうぞ」「さあお入なされませ」「やれとめとめ」「なんじや系」「是はならぬ」「ちと尋<sup>たづね</sup>たい」「こわいちごじや」「見事見事」「あゝいたした」



(巻3の4「水上は泪の雨古郷の母の煩ひ」22ウ・23オ)

翻刻

・ ・ ・ どもがのばさず事はならぬ。はやく其少将をつれ来れ。あなたがたの此辺へおこしなさるゝといふ事が、なみなみに心やすい事とおもふか。いかふ重い義じやが何と心得た」と目に角たてゝねめまはせば、くつわもあげやも顔色青くなりて、もみ手して勝手へはいり、「どぶして出さずばなるまいが、むりに出したら日比短気なむまれつきの少将、座敷中でのどのやうな俄事が出来もしれず。是はまづ何とかせん」と、廊中打寄て汗をながして、ひそひそと談合するも尤の事ぞかし。されば、箱王は女犯肉食をして成共、師の坊に見はなされ、山を追たてられて、釈門に入ぬやうにと、寺には片時も居ずして、鎌倉中をのらつきしが、日外、我をかばひて裏道より逃のかせし利発娘、親の為に身を売、けはひ坂にゐるよし。せめてはあふて詞の礼をもらはせやと、包銀を懐中し廊へゆきて、一二度あふた初川といふ同女郎にたより、「牢人娘此比此里へ出たるよし。其家其名をしられざるや」とたづぬれば、「成ほどそれはくすはらやの少将さまとて、今日、矢車やで水上（遊女がはじめて客をとること）があるはずなりしに、母御の煩ひについて、けふをのばして下されと、さまざまの断。お客がぶすいで中々ならぬとの事ゆへ、女郎は死なふとある。大臣はよべといはるゝ。くつわあげやの難義最中」とかたるほどに、是は聞ずてに成がたし。先度の礼に是非隙もらふて、母の死目にあはせんと、おもひたつより、すぐに、くすはらやへゆき、客の名をきけば、工藤左衛門が悴犬房丸とや。いよいよ以て好む所の相手と悦び、「我にまかされよ、首尾よく今日をもらふて参らせん」と、心安く申ほどに、おやかた悦び、「とかくよろしう頼上る」と申せば、少将も立出、「どぶやら見たやうなおかたさまなるが、ひとへにおまへを氏神さまと存じます。一生此御恩忘れはいたさじ」と手をあはせ、しくしく泣てたのみけるを「何がさてきづかいあるな。慥にけふのしゆかうをもらひ、お袋に心よくたいめんさせませふ」と、それより矢車屋に行、ずんど座敷へとをつて、「自分義は今日水上とやら水ぬきとやらなされふとある。女が為には仮の兄弟、先何にもせよ、のがれ・・・

話の大意

筥王（箱王）の、恋人とのなれそめのお話です。遊女“少将”は、きつぷがよく、おのずと位があるたいへんな美人です。少将がはじめて水上する日、彼女は母親の危篤の報を受け、母に会いたいと願い出ます。しかし、それを聞いた客は、血相を変えて許しません。ちょうどそこへやってきた筥王（箱王）は、困っている彼女を助けます。

(森)

## 御伽曾我後之巻 風流東鑑（ふうりゅうあずまかがみ）

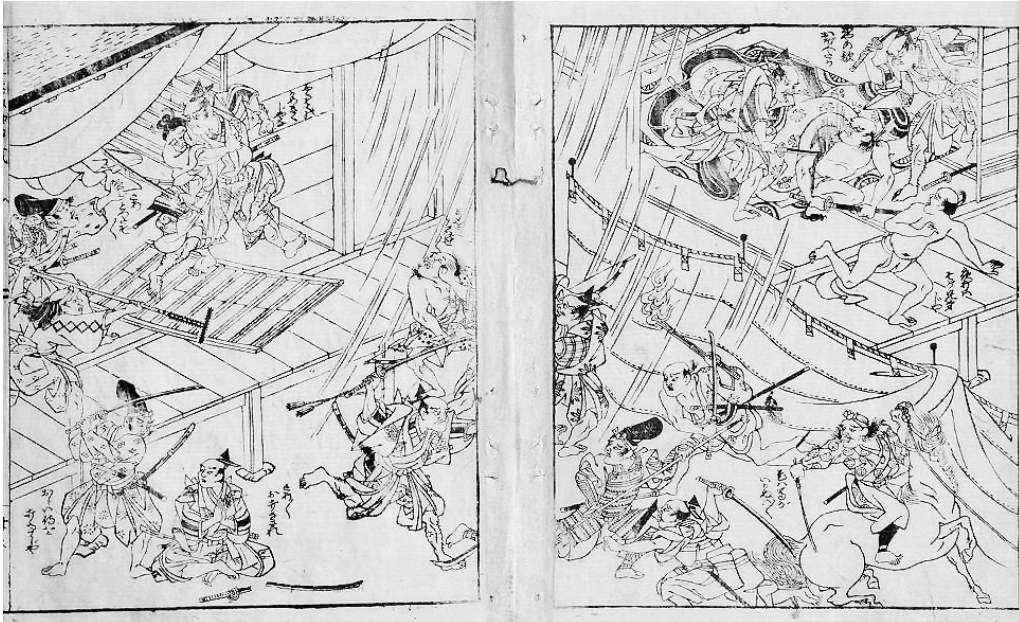
大本5巻5冊

内題：当世御伽曾我後風流東鑑

正徳三年（1713）三月、八文字屋八左衛門新板（京）刊。

〔作者江島其磧〕

（岡谷文庫 913 52/H）



（巻8の4「夜廻りの拍子木打ちたり敵」24ウ・25オ）

『当世御伽曾我』の後編。兄弟の仇討ち場面が登場する。管王は、父の弔いのため出家をしていたが、仇討ちをするために勝手に還俗し、怒った母から勘当されていた。建久4（1193）年5月、富士山山麓にて狩が行われることになり、ようやく兄弟に、祐経暗殺の機会が到来する。管王は武士として元服し、母も、命より名誉を重んじる武士道を理解し、和解する。兄弟は長年の本望を達成する。

挿絵は

右上：祐経を討つ場面です。

右下：討って大騒ぎになっています。

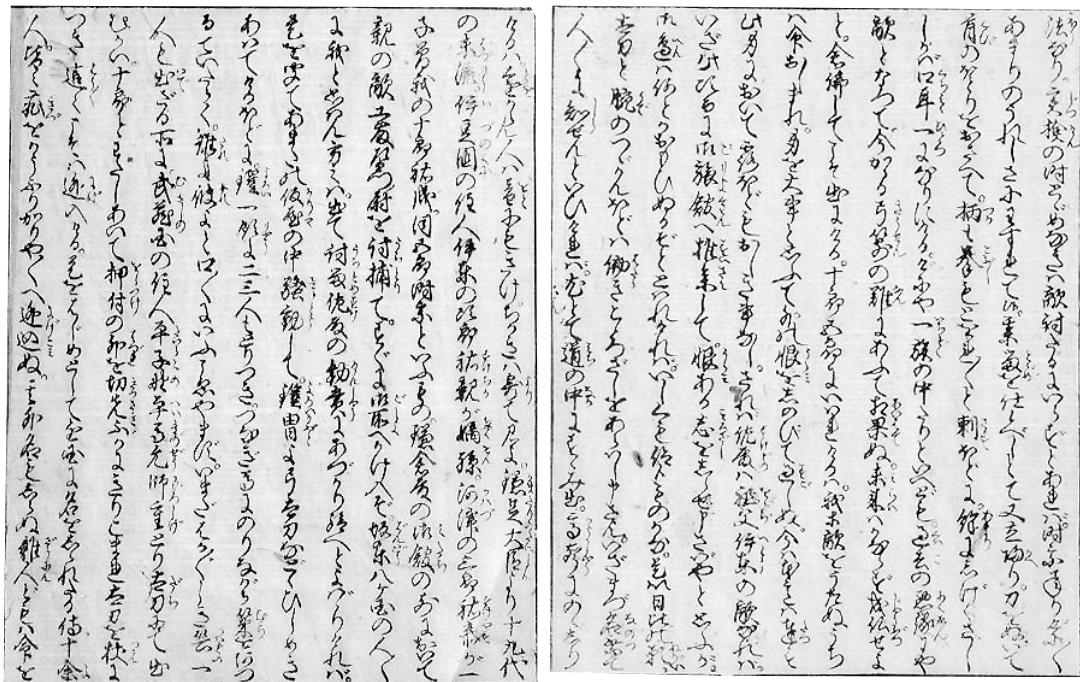
左上：第五郎が生け捕りにされます。

左下：兄十郎が自分を討ってもらう場面です。

画中詞は右から順に

「夜打はそが兄弟じゃ」「親の敵おぼへたか」「是は馬がいかぬはいかぬは」「弓をはなせ、はなせ」「やくそくのかめぎくじやな」「さあさあ、お打なされ」「さあ、とつたぞとつたぞ」「おいしい侍を打事じゃ」





(巻8の4「夜廻りの拍子木打ちたり敵」25ウ・26オ)

翻刻

・・・法なり。実検の時とゞめなきは敵討たるにいらず」とあれば、時宗承り、「げにげにあまりのうれしさにわすれて候。某留を仕候べし」とて又立帰り、刀をぬいて首のほりをおさへて、柄も拳もとをれとをれと刺ほどに、余にしげくさししかば、口耳一になりにける。「げにや一族の中たりといへども、過去の悪縁にや敵となつて、今かゝる弓箭の難にあふて相果ぬ。未来はかならず成仏せよ」と、念仏してこそ出にける。十郎、五郎にいはいはれるは「我等敵をうたぬうちは、命おしまれ、身を大事と思ふて、外の恨をしをのびて過しぬ。今は本意は達す。此身において露ほどもおしき事なし。されば佐殿は祖父伊東の敵なれば、いざ此次に御旅館へ推参して、恨ある志をしらせ申さばやと思ふが、御辺は何かおもひぬるぞ」とはれければ、「いしくも仰候ものかな。是以日比の願、太刀と腕のつゞかんほどは働き、こゝろざしをあらはし申さん。いざまづ名乗て人々に知せん」といひければ、「尤」とて道の中にすゝみ出、高声にのゝしりけるは、「遠からん人は音にもきけ。ちかきは寄て見よ。鎌足大臣より十九代の末流、伊豆国の住人伊東の次郎祐親が嫡孫、河津の三郎祐泰が一子、曾我の十郎祐成、同五郎時宗といふもの、鎌倉殿の御館の前において、親の敵工藤左衛門ノ尉を討捕て、すぐに御所へかけ入ぞ。板東八ヶ国の人々に、我と思はん方々は、出て討留、佐殿の勤賞にあづかり給へ」とよばゝりければ、是を聞て、あまたの仮屋の中騒動して、「鎧冑よ、弓太刀」などゝひしめきあはてけるほどに、鎧一領に二三人もとりつき、つなぎ馬にのりながら策をあつるていたらく、誰よ彼よと口々にいふこゑやまず、いまだはかばかしき兵一人も出ざる所に、武蔵国の住人、平子野平馬允師重とり太刀にて出むかい、十郎とわたしあいて、押付の外を切先ぶかにきりこまれ、太刀を杖につき這々こそは逃入ける。是をはじめとして、近国に名をしられたる侍十余人、皆々疵をかうぶり、かりやかりやへ逃込ぬ。其外名もしらぬ雑人どもは命を・・・

話の大意

仇討ちの場面が、臨場感あふれる描写で描かれます。雨が降り、みな酒を飲んで寝静まっています。兄弟は、ぐっすり寝ている祐経の寝場所に押し入り、とうとう祐経を討ち取ります。そして、兄十郎は、恩のある武將に自分を討ってもらうように頼み、いさぎよい最期を迎えます。一方、弟五郎は、なじみの遊女“亀菊”に扮した武將に、生け捕りにされてしまいます。

(森)

## 新板絵入 世間娘容気 (せけんむすめかたぎ)

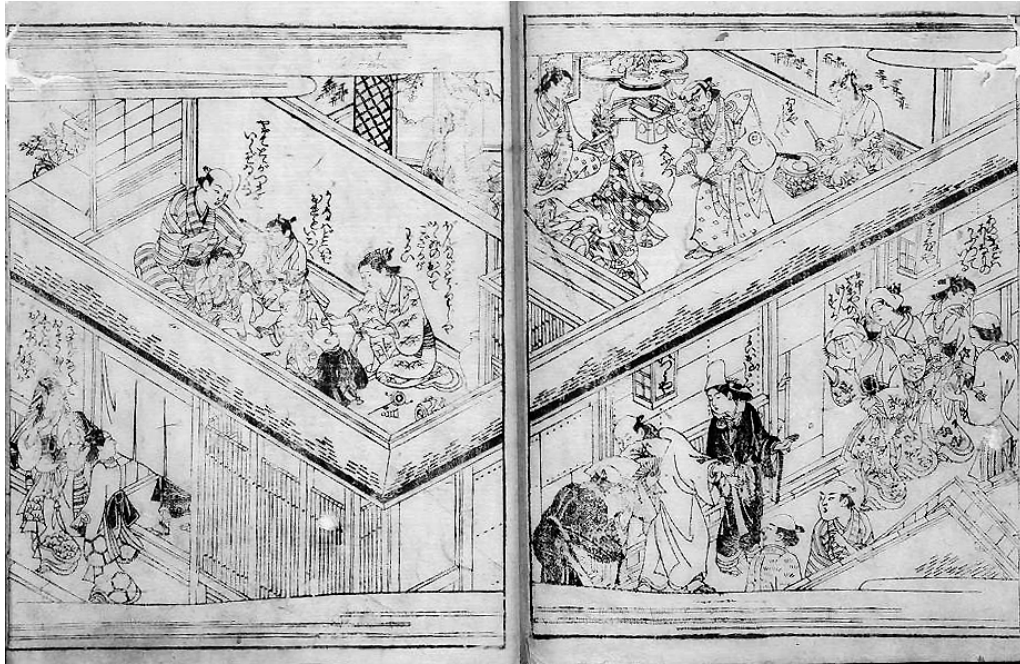
大本6巻6冊(巻5欠)

内題：世間娘気質

享保二年中秋吉旦、作者其磧自序。

享保二年(1717)八月、谷村清兵衛・江島屋市郎左衛門 刊。

(岡谷文庫 913 52/E)



(巻1の1「男を尻に敷金の威光娘」5ウ・6オ)

「<sup>かたぎもの</sup>気質物」は浮世草子の分類のひとつで、代表的作家である江島其磧は、『世間子息気質』をはじめとして多数の生彩を放った気質物を描き好評を博している。『世間娘容気』では、町人の娘を素材として、様々な「ムスメ」像を誇張して面白おかしく描かれている。その中に女性観、女性の社会的地位やモラルが浮かび上がる。また、若い女性に共通した感覚は、現代にも通じるものが随所に見られる。

挿絵は

祝言の部屋の椿事を右上に、屋敷内から往来までを通して、当世の生活や「娘」風俗が描かれています。往来の女性の衣装や出で立ちには、当時都風の流行の中にも<sup>りんき</sup>格気が強い女性の様子が、誇張されてコミカルに描写されています。(右下の女性：筭曲の髪のはこりよけに、灯油紙製の<sup>えぼし</sup>烏帽子を被ったり、武家の女中を真似てか街中で雨合羽を着たりしています。)

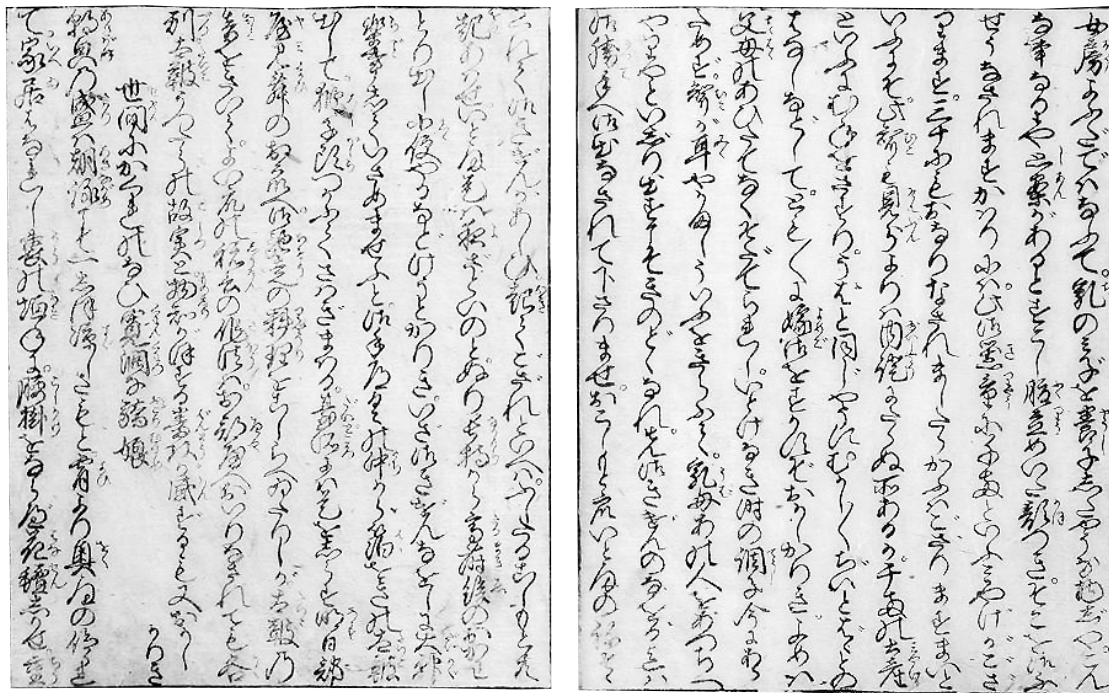
画中詞は右から順に

「あのおなごはあじなものがぶつている」「女中茶やのけんする」「あれやしたした」

「よいお山じや」「大ぶつ大ぶつ」

「ぼんさまがどうりじや、かゝさまのおいてござるがわるい」「かゝさまはどこいぞ、おれもいこいこ」「やがてとゝがつれていくぞ、なくなくな」

「子どもがなくでおそう出た、しばゐへおそうならねばよいが」



(巻1の1「男を尻に敷金の威光娘」8ウ・9オ)

翻刻

・・・女房よふだではなふて、乳のみ子を養子したやうなものじゃ。こんな事なりや思案がある」とすこし腹立めいた顔つき。「そこを御ふせうなされますかはりには、此御器量に千両といふみやげがござります。三十にもおなりなされましたら、かふはござりますまい」といふにぞ、此<sup>むこ</sup>賀<sup>けんぶん</sup>も見分よりは内証にたらぬ所あるか、千両の土産といふにむねをさすり、うばと同じやうに、むかしむかしぢいとばゞとのはなしなどして、ともどもに嫁御をすかすぞおかしかりき。よめは父母のあひだてなくそだてられし、いとけなき時の調子今にあらためず。賀が耳やかましよういふをきらふて、「乳母あの人をあつちへやりや」といじり出すこそきのどくなれ。「先、御きげんのなをる迄は、御勝手へ御出なされて下さりませ。おこしもと衆、いとさまのねそゞくれて、御きげんがあしひ。起てござれ」といへば、ふしたるこしもと共起あはせ、「いとさま是は夜ざといの」と、ぬり長持から高時<sup>たかとき</sup>絵のおかわとり出し、小便やるなどけうとかりき。「いざ御きげん<sup>だいかくら</sup>なをしに、大神楽事<sup>ごと</sup>していさめませふ」と、御手道具の中から箔をきの太鼓出して、獅子頭つかふてさはぎまはる。台所には是をしらず、明日部屋見舞のお衆へ、御馳走の料理をこしらへるたりしが、太鼓の音をきいて、「よい衆の祝言の作法は、お部屋へおいりなされても各別、太鼓うつたらの故実<sup>こじつ</sup>と、物知<sup>ものしり</sup>がほする番頭が感ずるも又おかしかりき。

話の大意

千両の持参金付きの美しい十七歳の花嫁が、乳母の乳を離れられない赤子同然の女性であったという話。寝そびれて、まさに幼児のようにぐずっている花嫁の機嫌を取るために、賀をはじめお付きの女房衆が、神楽もどきに宴をはる、婚礼の夜の騒ぎです。

(渡邊)